

大学教員による授業内容の決定方法に関する分析

Analysis on University Teachers' Decision Making on Setting Course Contents

今野 文子^{*1}, 三石 大^{*2}

Fumiko KONNO^{*1}, Takashi MITSUISHI^{*2}

^{*1} 東北大学 高度教養教育・学生支援機構

^{*1}Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

^{*2} 東北大学 教育情報基盤センター

^{*2}Center for Information Technology in Education, Tohoku University

Email: fumiko@m.tohoku.ac.jp

あらまし：大学教員の授業設計時の取り組み内容を明らかにし、その内容を教員研修等に反映することを目的として、東北大学の教員を対象に、授業設計・授業準備に関する調査を行った。その結果、授業内容の決定方法は、教員の職階や専門分野により違いがあることが明らかになった。これらの知見を活かして、全学のおよび分野別の研修の開発・設計に取り組むことで、より有効な研修を提供できると考えられる。

キーワード：教授設計，授業設計，インストラクショナル・デザイン，FD

1. はじめに

専門分野により、それぞれ研究方法や教授方法が異なるだろうということは、これまで広く一般的に認識されてきたことである。しかしながら、それが具体的にどのように違うのか、それぞれの分野の教員がどのように教育活動を設計し、実践し、評価しているのかについて、大学教員を対象とした総合的な調査の報告はこれまでにない。

そこで、これからの高等教育を担う若手教員の育成プログラムや支援方法の開発に役立てるために、東北大学に在籍する全教員を対象に「大学教員による授業準備調査」を実施した。調査の全体に関する速報は報告書⁽¹⁾に掲載している。本稿では、その中から、授業内容の決定方法について取り上げ、職階、専門分野別の傾向について統計的に分析する。また、この結果をもとに、教員研修プログラム等の開発の際に留意すべき点について議論する。

2. 調査の概要

本調査の対象は、2012年12月時点で東北大学に在籍する教員とし、2013年の2月に調査票を送付して実施した。調査票では、回答者の属性と授業準備、改善の取り組みに関する24の質問を設けた。

本調査票の回収数は1,290件（回収率47.37%）、このうち有効回答数は1,137件（41.76%）であった。

回答者の属性のうち、職階と専門分野を表1に示す。回答者のうち、職階と専門分野の両方を回答した者は1,122人であった。表1からは、人文・社会科学では教授の割合が多く、それと比較して医歯薬学など理系分野では助教の割合が多いが、これは、もともとの東北大学の在籍教員の割合を概ね反映したのになっているといえる。

3. 調査結果

調査票の質問の中から、「授業の内容をどのように

表1 回答者の属性

		人文科学	社会科学	農学	理学	工学	医歯薬学	全体
教授	度数	26	36	21	67	126	91	367
	%	40.0	46.8	34.4	31.2	37.8	24.5	32.7
准教授	度数	24	28	18	66	106	61	303
	%	36.9	36.4	29.5	30.7	31.8	16.4	27.0
講師	度数	5	2	0	9	7	60	83
	%	7.7	2.6	0.0	4.2	2.1	16.2	7.4
助教	度数	10	10	21	68	94	157	360
	%	15.4	13.0	34.4	31.6	28.2	42.3	32.1
その他	度数	0	1	1	5	0	2	9
	%	0.0	1.3	1.6	2.3	0.0	0.5	0.8
合計	度数	65	77	61	215	333	371	1,122
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

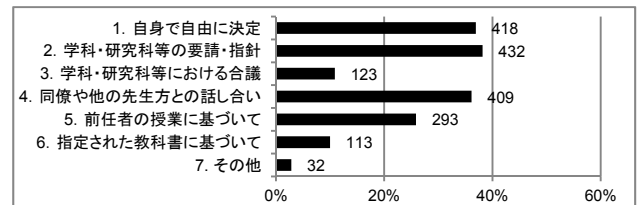


図1 授業内容の決定方法（全回答）⁽¹⁾

決定しましたか（複数回答可）」についての回答を取り上げ、職階と専門分野別の傾向について分析する。

3.1 授業内容決定方法の全体の傾向

授業内容の決定方法についての全回答の集計結果を図1に示す。全体では、「2. 学科・研究科等の要請・指針」が最も多く38.2%、続いて、「1. 自分で自由に決定」36.9%、「4. 同僚や他の先生方との話し合い」36.1%であった。

3.2 授業内容決定方法の職階別傾向

次に、職階別に集計した結果を図2に示す。

カイ二乗検定の結果、項目1 ($\chi^2(3)=60.049, p<.001$)、項目3 ($\chi^2(3)=9.098, p<.05$)、項目4 ($\chi^2(3)=24.097, p<.001$)、項目5 ($\chi^2(3)=12.789, p<.01$)について職階による有意差が認められた。

この結果から、職階が高くなるほど自身で自由に授業内容を決定している割合が高く、同僚や他の先

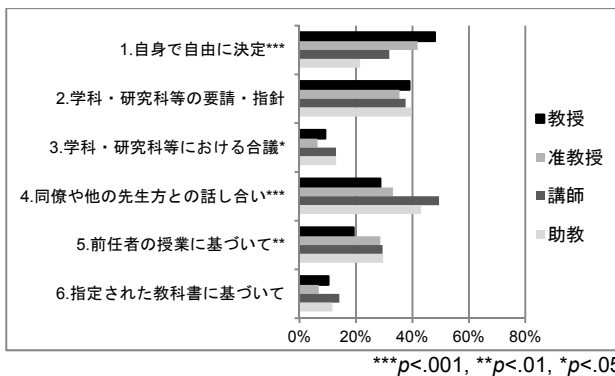


図2 授業内容の決定方法 (職階別)

生方との話し合いをもとに決定する割合は低くなる
ことがわかった。一方で、学科・研究科等の要請・
指針、指定された教科書に基づく決定をしている割
合は、職階による差はなかった。

3.3 授業内容決定方法の専門分野別傾向

続いて、専門分野別の集計結果を図3に示す。

カイ二乗検定の結果では、項目1 ($\chi^2(5)=106.718$, $p<.001$), 項目2 ($\chi^2(5)=32.913$, $p<.001$), 項目3 ($\chi^2(5)=17.033$, $p<.01$), 項目4 ($\chi^2(5)=13.102$, $p<.05$), 項目5 ($\chi^2(5)=18.576$, $p<.01$), 項目6 ($\chi^2(5)=14.630$, $p<.01$) となり、すべての項目で有意差が認められた。

特に、自身で自由に決定すると答えた割合は、人
文・社会科学では7割近くに上ったのに対し、医歯
薬学では2割強にとどまった。学科・研究科の要請・
指針は、農学では2割にとどまる一方、医歯薬学で
は5割近くに上った。その他の項目(項目3~6)で
は、概ね文系分野で低く、理系分野で高い傾向にあ
った。

4. 考察

職階別の分析結果からは、職階が高くなるほど自
身で自由に授業内容を決定しており、一方で若手は、
同僚や他の先生方との話し合いを参考にする割合が
高いことがわかった。これらのことから、職階が高
いほど、比較的自由に授業内容を決定し、若手は組
織内の合議や同僚・先輩教員らとの話し合いにより
決定していることがわかる。

専門分野別にみると、文系では特に自由に授業内
容を決定している傾向が強い一方で、理系では、組
織的な意思決定がなされているといえる。これは、
理系分野には資格取得のためのカリキュラムや、教
学、物理など、積み上げ式で学ぶ内容が順序立てて
設定されている科目があること、教えるべき科目内
容の教科書が存在する場合は比較的多いことなどが
関係していると考えられる。

これらの差異の一部には、専門分野による各職階
の教員割合の違いも影響していると考えられる。表
1に示したように、例えば人文科学では回答者の
40%が教授であったのに対し、医歯薬学では教授が
約25%、助教が42%となっている。ここで、助教の
みを抽出して分析したところ、助教であっても、例

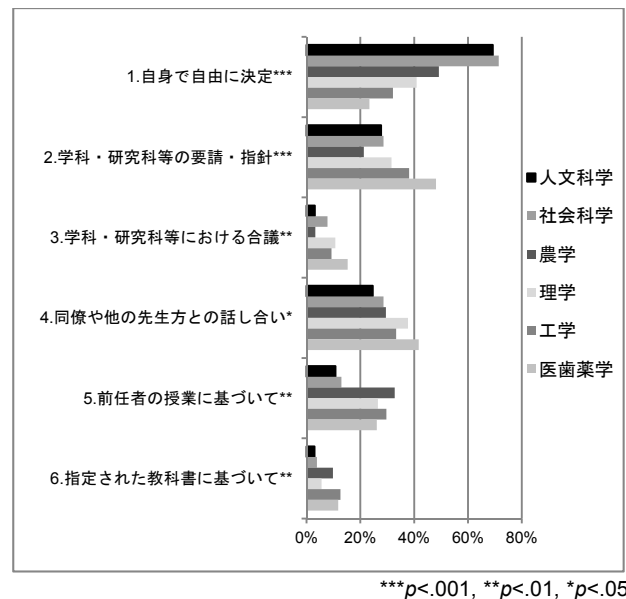


図3 授業内容の決定方法 (専門分野別)

えば文系分野において自身で自由に授業内容を決定
している割合は理系分野よりも高いなど、概ね分野
別の傾向があることがわかった。しかし、教授のみ
を抽出した場合と比較して、助教間では分野別の差
異が小さくなる傾向があった。

以上のことから、授業内容の決定においては、職
階や専門分野により異なる方法がとられており、こ
うした違いに配慮して教員研修プログラムの内容を開
発する必要があるといえる。例えば、文系分野では
、授業設計に取り組む場合、「何を教えるか」が出発
点になる傾向にあるのに対し、理系分野では、学科
・研究科の要請や指針、合議の内容の確認、まわりの
教員とのコミュニケーションや、前任者の授業内容
を踏まえることから始め、「どう教えるか」を中心に
設計に取り組む傾向にあることを念頭におく必要があ
るといえる。

5. 今後の課題

他の設問の回答結果についても分析を実施すると
ともに、教員に対するインタビューを実施し、職階、
専門分野別にみられる差異の理由について、質的な
データとあわせて、さらに分析を進めることを予定
している。

謝辞

本調査にご協力いただきました皆さまに心より感謝申
し上げます。また、本調査の実施に当たり、高度教養教育・
学生支援機構の羽田貴史教授をはじめ、大学教育支援セン
ターのスタッフ(当時)の協力を得ました。ここに記し、
感謝の意を表します。なお、本研究の一部は、JSPS 科研
費 24700883, 23501092 の助成を受けたものです。

参考文献

- (1) 東北大学 高等教育開発推進センター編：“大学教員
の授業準備に関する調査報告書”，CAHE TOHOKU
Report 53, (2014)